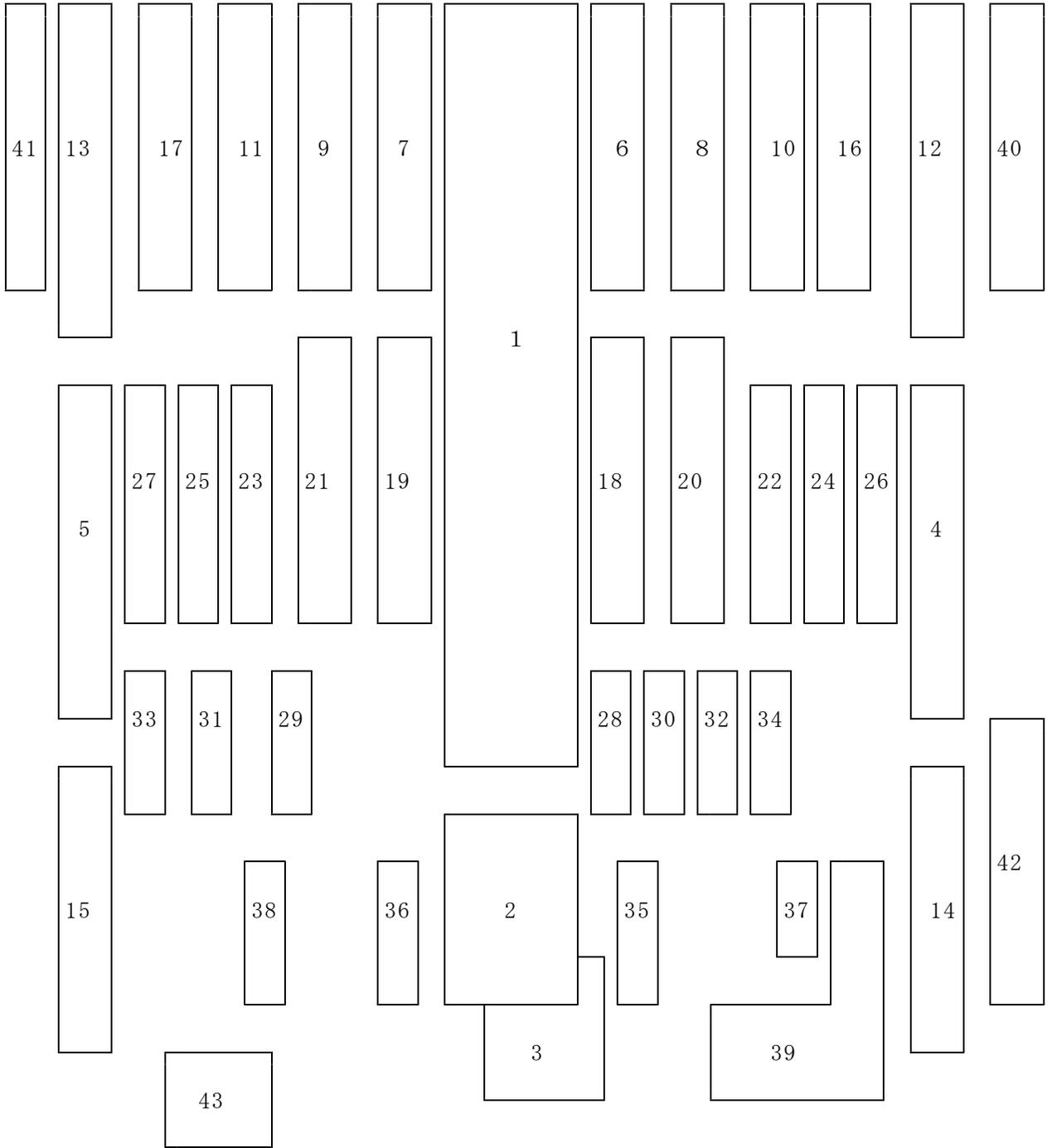


# 本尊の図表と解説 honzon of diagram & description



※昭和42年（1967）1月7日日達上人書写の御形木【印刷本尊】（三寶院安置）の配置を参考に説明

## 1、南無妙法蓮華經 nanmyoohoorengkyo

法華經に説かれる一切衆生成仏の要となる法は「妙法蓮華經」五字で、法華經の中には「南無妙法蓮華經」の七字の御題目は有りません。日蓮大聖人も御書の中で「五字、七字の題目」との表現をされています。しかし、本尊中央には南無妙法蓮華經と七字の題目が示されているという事は、

【南無】は帰依、帰命、自分の生命を掛けて、自分の生命として妙法蓮華經の法を信じます。という意味が込められての「南無妙法蓮華經」であります。つまり、仏の側に立てば、仏として、もう悟っている訳ですから、南無はいらない事になります。しかし、本尊の一番中心の根本に南無妙法蓮華經と示されるという事は、一切衆生の成仏の為に、一切衆生の側に立って本尊が顕されているという事であります。同様に、私達が唱える「南無妙法蓮華經」の御題目も本尊に示された「南無妙法蓮華經」と同じ意味であります。日蓮大聖人も自分が書かれた南無妙法蓮華經の本尊に南無妙法蓮華經の御題目を弟子、御信者と共に手を合わせ法華經の行者として唱えたのであります。

御本尊の南無妙法蓮華經の題目は一般的な漢字の書体と違って南無妙法蓮華經七文字の中の法の字体だけ変化させず、法を中心に法以外の文字は字の一部を長く左右に伸ばしています。この姿が、髭に見える事から、昔から「髭題目」と呼ばれて来ましたが、御本尊の四隅の東西南北守護を表す四天王と、精神世界を表す不動明王愛染明王が表記されている事を考えると、森羅万象の中心根本の南無妙法蓮華經の法を光の光源として中心に顕し、森羅万象法界に平等に光が拡散し及ぶ一切衆生成仏（広宣流布）の姿を表しているのであります。形態だけを表現している「髭題目」では無く、法の功德が森羅万象にあまねく及ぶ意味を表現した「光題目」の表現が適切であると思います。

【妙】とは森羅万象の中で最大最高の不思議。それは、迷心、悪心の元品の無明(生命に具わっていて、退治する事も、断じ尽くす事も出来ない暗黒の心)を持っている凡夫でも、それを抱いたまま成仏する事が出来るという、法華經以前の經典では否定されて来た一切衆生成仏が説かれた唯一の不思議な法が法華經の妙法蓮華經の中に説かれているという意味であります。

【法】は【妙】が説かれている法の意味。

【蓮華】は、仏は、この【妙法】を衆生に説明する為に、蓮華を譬えに使い、森羅万象の全ての生命は永遠常住であり、全ての生命が繋がっていて、当然、仏の生命とも繋がっ

ていて、因果 時、瞬間瞬間の生命の中に原因と結果が同時に内在しているのであります。親が原因で子供が結果として生まれ、その子供が原因として孫が産まれるとすれば、子供は結果であり原因でもあり、どちらでもあります。昨日、今日、明日も同じ様に、全ての生命は過去、現在、未来の永遠が重なり合って内在し具わっている生命の本質を示しています。この【蓮華】は禅宗の「拈華微笑」の様な具体性を欠く百人百色バラバラの解釈が生じる様な蓮華とは違います。

【経】とは、【妙法蓮華】が説かれている御経という意味であります。

本尊の中央首題は、森羅万象の生命の本質、根本、中心の法であり、同時に十界互具の生命に具わる仏の生命を顕しているのであります。

## 2、日蓮nitiren

【1】の「南無妙法蓮華経」と【2】の「日蓮」によって、法と人との一箇「人法一箇」（人と法の一体不二）法華経の行者として成仏の姿を示しています。

## 3、在御判zaigohan

龍ノ口法難に於いて、法華経の行者として人法一箇し、成仏の手本を示し末法の本佛の自覚を持たれた日蓮大聖人が永遠常住に生きて、この御本尊を顕しているという意味であります。現実には日蓮大聖人は法としては永遠常住ですが人間としては生存していませんので、時代時代の貫主が日蓮大聖人に代って本尊を顕している。

日蓮大聖人自身が書かれた本尊は、当然、日蓮と花押だけですので、日蓮大聖人亡き後、日興上人が、この在御判と書かれるようになったのであります。

日蓮大聖人、日興上人、日目上人を三祖とする日蓮正宗以外の日蓮宗系各宗派は、日興上人と同様に在御判と書いていましたが、徐々に【43】の部分【2】【3】の位置に持って来て、本尊を書いた人の著名とする事が常態化して行きます。それぞれの宗派の貫主は、大難四ヶ度小難数知れずの法華経身読の法華経の行者日蓮大聖人「人法一箇」の生き方をしていない訳ですから、本尊中央に南無妙法蓮華経 自分の名前を書く値は無く【39】の法から外れるのであります。

「日蓮在御判」は、日蓮大聖人滅後、日興上人が日蓮大聖人の、法を根本とした教えを踏まえて顕した、日蓮正宗の本尊の独自の姿であります。

#### 4、不動明王 fudoomyouoo

生死即涅槃。一切衆生の限りなく繰り返す生死の世界に仏の生命が具わる。

#### 5、愛染明王 aizenmyouoo

煩惱即菩提。一切衆生の限りない迷いの煩惱の中に仏の生命が具わる。

【4】 【5】 で無量無辺無限の精神世界全てを網羅し、法華経の行者を守護する。

日蓮大聖人が最初に本尊を顕したのは、文永8年（1271）太才辛未10月9日

相州本間依智郷にてであります。

この本尊から「御本尊集目録」立正安国会発行 山中喜八編集

の本尊番号①～⑦までの初期の本尊は、

中央首題 南無妙法蓮華経 日蓮 花押

不動明王（梵字） 愛染明王（梵字） 日付③④⑤⑥⑦は無し 讃文③⑤⑥⑦は無し

の座配であります。これは、後年、四天王を四隅に座配し現実の東西南北の国土認識を加えて行きますが、初期段階の本尊によって、あくまでも本尊は生命（心）の世界を顕さんが為の存在である事が、絶対必要項目だけを顕した初期段階の本尊の骨格として理解できるのであります。

#### 6、南無多宝如来 namutahoonyorai

過去世において、多宝如来は東方世界、宝浄国の仏であった。仏に成る前の菩薩の修行中に、「私が仏となって亡くなった後にも、未来に法華経を説く仏が現れた時には、いずれの時代であろうが、いずれの国土であろうが、駆けつけて、そこに宝塔を湧現させ、法華経が真実の法である事を、初めて聴いて、信じる事が出来ず、呆然として迷っている衆生に、私の経験を踏まえて、法華経が一切衆生成仏の唯一の法であるという、真実を証明しよう。」と誓願を立てた、法華経証明仏であります。

【6】 【7】 【8】 【9】 【10】 【11】 【18】 【19】 【20】 【21】 の頭に付く南無（帰依、帰命）は、全て南無妙法蓮華経の法が悟りの主体である事が必要条件であって、それぞれの仏、菩薩、尊者等の個人に帰命、帰依している意味ではありません。

## 7、南無釈迦牟尼仏namusyakamunibutu

生涯、84000もの経典を説いた釈迦牟尼仏を信仰上、尊敬するのでなく、法華経を説いた釈迦牟尼仏の悟りの根本である南無妙法蓮華経の法を尊ぶ。

## 8、南無上行菩薩namujyougyoubosatu

【8】【9】【10】【11】の四人の菩薩が、「従地涌出品第十五」に説かれる地涌の菩薩の代表として呼び出される四人の中心者が上行菩薩。

「如来神力品第二十一」において、未来末法に南無妙法蓮華経の法を弘通する為、法華経の肝要、妙法蓮華経を上行菩薩が代表として釈尊より四菩薩はじめ地涌の菩薩に南無妙法蓮華経の法を付嘱（法の継承バトンタッチ）された。

## 9、南無浄行菩薩namujougyoubosatu

四菩薩の二番目。

## 10、南無無辺行菩薩namumhengyoubosatu

四菩薩の三番目。

## 11、南無安立行菩薩namuanryuugyoubosatu

四菩薩の四番目。

## 12、大持国天王daijikokutennoo

東方世界の守護の善神

※神は、キリスト教・ユダヤ教・イスラム教や神道が主張する天地創造神では無く、仏教ではあくまでも仏を手助けする立場の存在です。仏が本地で神が垂迹（仏が衆生を救う為に仮の姿を借りて世の中に現れる）

## 13、大毘沙門天王daibisyamontennoo

北方世界の守護の善神。

## 14、大廣目天王daikoumokutennoo

西方世界の守護の善神。

15、大増長天王daizoucyoutennoo

南方世界の守護の善神。

【12】 【13】 【14】 【15】 四天王で無量無辺無限の東西南北、森羅万象の廣大無辺の全世界を網羅し法華經の行者を守護します。

16、若悩乱者頭破七分nyakunouransyazuhahitibu

一切衆生成仏の法である南無妙法蓮華經の道理の法を信じる事が出来ない者は、自分の思考を中心にし正しいと考える為、真理、道理から外れ心が散乱分裂する。頭とは心の事。法華經「陀羅尼品第二十六」に、「説法者を悩乱せば、頭破れて七分に作ること」とある。

妙楽大師は「法華經文句卷四下」の中に「薬王菩薩本事品第二十三」を解釈し法華經の持經者の罪科を表した言葉。弘安二年（1279）頃より定着不動。

17、有供養者福過十号ukuyoushafukukajuugoo

一切衆生成仏の真実の南無妙法蓮華經の法を供養する者は、仏（仏の優れた資質を表現する為仏に十種の名前が有る事を十号と言う）よりも優れる。妙楽大師「法華文句記卷四下」の中に「薬王菩薩本事品第二十三」と同様に「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是の如し。一切衆生の中に於いて、亦為れ第一なり」と、法華經持經者の功德を表した言葉。弘安二年（1279）頃より定着不動。

18、南無文殊師利菩薩namumonjyusiribosatu

迹仏（本仏が衆生を導く為に衆生の機根に合わせた多種多様な特質特性を持った、権仏）に教化された菩薩の代表者。「提婆達多品第十二」に説かれます。

19、南無普賢菩薩namufugenbosatu

【18】の文殊師利菩薩と共に迹仏に教化された菩薩の代表者。「普賢菩薩勸発品第二十八」に説かれます。

## 20、南無舍利弗尊者namusyarihotusonjya

釈尊の十大弟子の一人。智慧第一。「方便品第二」に説かれます。

## 21、南無迦葉尊者namukashousonjya

釈尊の十大弟子の一人。頭陀第一。釈尊滅後、仏典結集の付法蔵第一番。「授記品第六」に説かれます。

## 22、大梵天王daibontennoo

仏法守護の善神と同時に、娑婆世界の主。

## 23、帝釈天王taisyakutennoo

仏法守護の善神（別名・釈提桓因と書かれる本尊があるが、大梵天王、大月天王、大日天王と帝釈天王は同列に天王と表現される共通性が損なわれる為、敢えて釈提桓因と表現される意味の必要性は無いと思われます。（昔の日本人には一般常識として、帝釈天王＝釈提桓因の知識があつたが現代人には無く、意味が伝わりにくい）

## 24、第六天魔王大airokutenmaoo

法華経の行者が成仏を求める、信行の邪魔をし、法華経の行者の信心が成仏を求める真実の志しか否かを試します。

「治病抄」（全997p）には、「元品の法性は梵天、帝釈等と顕れ、元品の無明は第六天の魔王と顕れたり」と説かれます。元品の法性とは、全ての生命に本然として具わる仏の生命。元品の無明とは、全ての生命に本然として具わり、断尽す事の出来ない、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の迷心、悪心の生命。

## 25、大月天王daigatutennoo

夜空の星の中で一番大きい存在である月を自然界の夜中の守護の善神とします。

## 26、大日天王dainititennoo

昼の星の中で一番大きい存在。自然界の日中の守護と恵みの善神とします。

## 27、大明星天王daimyoujyoutennoo

日天、月天と共に星の代表として、一等星の数十倍の光量を持ち、夕暮れの空に現れる一番星。最初で最大の為、日の出前に東天に現れる明けの明星。日没後に西天に現れる宵の明星（金星）を昼夜の中間を繋ぎ司る星とし神格化し守護の善神とします。

## 28、鬼子母神kisimojin

十人の長女から十女までの十羅刹女を手先として、自分の子供（千人、万人とも称す）を養い育てるエネルギーにする為に、次々と他人の子供を誘拐し殺し食べる。釈尊は嘆き悲しむ被害者の悲痛な訴えを聞き、鬼子母神の千人、万人の子供の中で一番末の子を隠した為。鬼子母神は狂人と化して、ありとあらゆる所を何度も何度も探すけれども見つからず万策尽き、只一ヶ所、探し確認していない出来れば絶対に会いたくない釈尊の所へ仕方なく尋ねに行きます。釈尊は隠していた子供を鬼子母神の前に出し、あなたの千人、万人の沢山の子供の中の一人がいなくなっても、貴女の苦しみ悲しみは計り知れない。貴女がして来た、他人の子供を誘拐し、殺し、食べた。その子供、親兄弟、親戚、友人、知人の苦しみ悲しみの深さが想像出来るかと法華経を通して論じます。法華経の教えによって、我が身を振り返り反省した鬼子母神は十羅刹女と共に、今迄の謝っても謝り切れない、何度生まれ変わっても償いきれない罪を償う為に、これからは、法華経の行者を守護し、子供を守る事を釈尊に誓ったのであります。本尊には【鬼】の字の角の`を取り【思】と書き直し【思子母神】（子を思う母の神）と表示されています。変毒為薬、罪人にも仏性が有り、正しい法に依る信仰と反省によって成仏する事が出来る事を明かしています。

どんな人間にも偏執の愛と殺人鬼と化す生命が存在している十界互具の生命の象徴として殺人鬼であった鬼子母神を本尊に表すという事は、他宗の完全無欠の迷いの無い慈悲深い塊の様な表現のみで、汚さは微塵も表現しない、仏像、菩薩像の本尊ではなく、私達の生命の醜さ汚さ（地獄）から凡夫が忘れ果てている尊貴（仏界）の生命までのあるがままを余すところなく顕しているのが日蓮大聖人の本尊なのであります。

## 29、十羅刹女jyuurasetunyo

【28】を参考。

## 30、提婆達多daibadatta

釈尊の従兄弟であり、釈尊を師匠として出家するが、釈尊より自分の方が優れていると慢心を抱き、釈尊を殺して、自分が釈尊に取って代われれば、仏教教団は今以上に繁栄すると考え、釈尊の篤信供養者であった頻婆娑羅王の息子阿闍世王を口説き結託し、阿闍世王に父を殺させ、自分は釈尊を殺す計画を立て実行し失敗します。この事により報いを受け、生き乍ら地獄に堕ちます。しかし釈尊は地獄まで提婆達多に会いに行き、あなたは生前、法華経に縁した事によって、未来、天王如来という仏となって、成仏する事を伝えて帰って来ます。弟子たちは釈尊を殺そうとして地獄に堕ちた提婆達多に対する釈尊の行動に不審を抱き尋ねます。すると、釈尊は、提婆達多は過去世に釈尊が修行の時、阿私仙人という師匠であった。その縁と功德によって私は今、釈尊として成仏し、衆生に妙法蓮華経の法を説き伝える事が出来た。どんな生命にも平等に仏の生命が具わっている。世の中には100%悪人も、100%善人も無く、全ての生命の存在は十界互具である事を説明します。この意義によって本尊に示します。

### 31、阿闍世王ajyaseoo

【30】を参考。

父を殺した上に重ねて母を殺そうとした時点で、釈尊に強く教訓され、目覚め、反省し、法華経の信仰に目覚め、以後、生前の父の様に、法華経への信仰と仏教供養の生き方を貫きます。

### 32、転輪聖王tenrinjyouoo

武力を用いず南無妙法蓮華経の法をもって全世界を平和に統治するとされる理想の王。

### 33、大龍王dairyuuoo

大海の水底にある竜宮に住み、大海を中心に世の中を守護し、法華経の行者を守護する善神。

### 34、阿修羅王asyuraoo

帝釈天と戦う悪神であったが、戒められた事を機縁に法華経の行者守護の善神となる。

### 35、天照大神tensyoudaijin

伊弉諾（いざなぎ）、伊弉冉（いざなみ）の第一子とされ、日本古来大和朝廷の祖先神。

### 36、八幡大菩薩hatimandaibosatu

日本古来の農耕神、元々は八幡大明神、東大寺建立に当たって銅産神として大仏造立を助けたと意義付けられ、仏教との関わりを深め、平安初期、神仏混合の象徴として天皇より菩薩号を贈られ八幡大菩薩となる。平家と源氏の戦争に当たり源氏は八幡大菩薩を軍神としてまつり源氏が平家を滅ぼし政権樹立、鎌倉幕府は鶴ヶ丘八幡宮を中心にして都市作りをし、民衆は権力にあやかる様に八幡大菩薩が全国にまつられる様になり、日本津々浦々に現代まで、まつられる神となる。日蓮大聖人は、八幡大菩薩の本地は釈尊とし、日本独自の【35】【36】も諸天善神として、法華経説法の際に名前は無いが、諸天善神であれば、当然参集していたはずであると考え、御本尊に書き入れられています。

天照大神、八幡大菩薩が本尊に定着するのは、後年、建治二年二月の本尊からで、それ以前の本尊には書かれたり書かれなかったりの存在でありました。

### 37、天台大師tendaidaisi

中国天台大師、智顛。一切の経典を学んだ上で法華経を最勝の法と悟り、法華経解説の『文句』『玄義』『止観』の三大部を表し。南三北七の諸宗を破して、五時八教（釈尊一代の説法を、【五時】①華嚴時②阿含時③方等時④般若時⑤法華涅槃時【化儀の四教《仏が衆生を教導する方法形式》】①頓教②漸教③秘密教④不定教【化法の四教《仏が衆生を成仏に導く為の教えの内容》】①三蔵教②通教③別教④円教）に分類し、法華経を最勝の依経としました。

日蓮大聖人は「三国四師」と言って、インド・中国・日本の三国に渡って、釈尊・天台大師・伝教大師・日蓮の四師の法華経の系譜を尊び、三師伝承の中味である南無妙法蓮華経の法を根本とし、御本尊に書き顕しました。

### 38、伝教大師dengyoudaisi

中国天台大師智顛の法華経最勝の教えを日本へ伝え、法華経の大乗戒壇建立を朝廷へ願ひ出る。最澄。

### 39、仏滅後二千二百三十余年之間一閻浮提の内未曾有之大曼荼羅也butumetugo nisenniHYA

kusanjyuuyonennoaida itienbudainouti mizouno daimandara

日蓮大聖人は、天台大師、伝教大師の法華経解釈を踏まえ、釈尊入滅をBC949と定め、そこから正法1000年の終わりがAD51年、像法1000年の終わりがAD1051年でAD1052年より末法という計算になります。

日蓮大聖人が御本尊を顕すのは、1271年の龍ノ口法難直後からで、初期本尊は「仏滅後二千二百二十余年と顕し、1275年身延入山二年目から仏滅後二千二百三十余年の十年進めて顕す様になります。実際の二千二百三十余年は1281年ですので6年前倒しとなりますが、熱原地方での幕府から圧政等の状況があらわになって来ている状態を考慮し末法の時代条件の象徴的姿と判断し三十余年に改めます。西暦1281年弘安四年から現在の2015年は734年が経過しているのですから、その年数も加算して、仏滅後2960余年と本尊に書かないのであります。という事は、在御判の意味する深義と連繫しているものであり、本尊を書いた人間の名前を書くことは本尊の意義から外れる事なのであります。バン字からボロン字の花押への変化も、弘安元年（1278）6月25日「日女御前御返事」（全1245p）に初見し、同年より変化定着して行きます。

代々の貫主は、本尊を顕す権能を持っているから、日蓮大聖人の法の全てが相承されている等と妄想し頑迷に言い張る人達がありますが、代々の貫主は仏滅後2230余年の時点に存在していない、日蓮大聖人の様な熱原法難の農民の様な法華経の行者では無いのであります。熱原法難を仰ぎ見て御本尊書写をする担当者なのであります。

釈尊・天台・伝教の法華経の系譜を踏まえて顕し始めた本尊から、釈尊・天台・伝教を超えた、法華経の行者として、師弟一箇、法華経身読の成仏、一切衆生成仏の久遠元初・本因妙・一念三千の法を本尊として顕したのであります。板や紙に顕したことが「未曾有」ではなく、久遠元初・本因妙・一念三千の法を本尊の中味内容として顕した事が、釈尊・天台・伝教にも超え、一閻浮提（森羅万象の中に於いて）未曾有の大曼荼羅なのであります。

#### 40、為現当二世tamegentounise

現当二世とは、現在と未来の二世という意味ですが、過去世を省略して表現していますので、元来の意味は過去・現在・未来の三世常住の為という意味です。

#### 41、授与之jyuyono

御本尊を下付する個人の名前は、不特定多数で有る事と、御本尊は印刷ですので、書かれていません。個人の名前はありますが、信仰心を持って御本尊を受持する人の為という意味であります。

42、昭和四十二年一月七日 syouwayonjyuuninenitigatunanoka

日達上人が1967年1月7日御本尊を書いた年月日。

43、第六十六世 日達花押 奉書写之 dai66se nittatu kaoo housyosyasi

日蓮在御判と示される御本尊ですが、現実には日蓮大聖人が生存し顕す事が出来ませんので、時の貫主が日蓮大聖人の代理として書きましたという、その時代の貫主の名前と花押（フリーハンドの印）大石寺六十六世日達。

「奉書写之」は之を書写し奉る。この本尊を私が書きました。之とは、戒壇本尊を写し奉るの意味だと主張する人達がありますが、戒壇本尊の内容とは違いますし、戒壇本尊が源で、各寺院の本尊が二番で各家庭の本尊が三番というランクはありません。戒壇本尊を写した本尊では無く、本尊とは、久遠元初・本因妙・一念三千・人法一箇・師弟一箇を中味の法として本尊に顕した物が全ての本尊であります。日蓮大聖人自身も「之書」「図之」と本尊に示します。この本尊を書いたという意味のみであります。

※ 別 記

## 本尊とは

○本尊とは、久遠元初・本因妙・一念三千・人法一箇・師弟一箇の、森羅万象全ての生命が繋がり互いに支え支えられあって、全ての生命が存在している一切衆生成仏の法を一切衆生に説き伝える為に顕したもので、本尊自体が法ではありません。

○四天王が東西南北の無量無辺無限の三千大千世界を示し。日天、月天が上空へ昼夜の区別なく無量無辺無限の世界を示し。転輪王、大龍王で大地、大海への無量無辺無限の世界を示し。提婆達多、鬼子母神、不動明王、愛染明王で示される心の世界の無量無辺無限の

世界を示し。森羅万象の中心根本の法である南無妙法蓮華經の法を表現しています。

○本尊は、須弥山（森羅万象の中心であり成仏のシンボル）を表現しています。

（本尊安置の台座の部分を須弥壇と表現するのは、この意味を示している）

○本尊は、南無妙法蓮華經の説法の間である靈鷲山を再現しています。成仏のシンボル。

○本尊は、宝塔涌現（南無妙法蓮華經）、二仏並座、三世常住南無妙法蓮華經の説法の本来3次元の立体臨場の場面状況を、板、紙の平面に表現している。

○本尊は、人法一箇、師弟一箇の成仏を表現している。

○本尊は、森羅万象一切衆生の生命（十界互具、一念三千）を写す鏡。あなた方の生命は南無妙法蓮華經を根本中心としてこうなっているんだよ。あなた自身の生命が写っているんだよと、示されているのであります。

○本尊は、眼に見えないけれども確かに存在する「心」「空気」「引力」「 $1+1=2$ 」の様な全てに平等な道理を一切衆生に教え伝える為に、先生が黒板に書いた未曾有の存在であります。

法を物に表す。法→物に示したのですから、物自体が法ではないのであります。

物を拝して、物の奥の眼に見えない法を想起して信仰しなければいけないのであります。

法→物→法ですから、本尊（物）を拝し、法に立ち返る。法⇔物が信心であり、成仏であります。

○信じる志で受持した本尊（物）は、日々生身の仏の如く給仕する事は勿論、受持した者が自分の生命を掛けて生命と等しく守護しなければいけません。本尊（物）が事故によって灰燼に帰しても法は無くなりません。物が永遠常住では無く、顕されている法が永遠常住の道理だからです。しかし、物に給仕し、生命掛けで守る志の無い者が、法を守ることは出来ません。

○本尊（物）だけが本尊ではありません。

本尊と成仏を求め信心修行する者が向かい合って一体となった所こそが、初めて信仰の対象としての本尊となります。

不信仰者にとっては、本尊は本尊では無く、憎しみの対象物であったり、奇妙な紙切れ板切れ黒塗りの位牌のお化けの様な物にしか見えないのであります。たとえ日蓮大聖人が書かれた本物の本尊であっても、他宗の寺院に安置されていれば、私達信仰者は、そこで本尊と拝して信心修行をする事は出来ませんし、しません。本尊が本物でも、その寺院の信仰がニセ物であれば、本尊として成り立たないのであります。本尊が本物か否か、本尊が謗法の場所に無いか否かと同時に自分の信仰が本物か否かを振り返らなければいけないのであります。

○弘安二年十月一日。日蓮大聖人が「余は二十七年なり」と、釈尊・天台・伝教と比較して、出世の本懐（仏法の完成）を示された事が、宗旨の建立であり、これが日蓮大聖人の顕された本尊の中味なのであります。建長五年四月二十八日を【宗旨建立】と称する人々がいますが、建長五年四月二十八日には未だ宗旨の根本である本尊を顕していないのですから宗旨は建立されていません。建長五年四月二十八日は法華経の行者としての出発の日である【立教開宗】が本来の意味であります。

戒壇本尊が全ての本尊の根本、源で、二番目が末寺の本尊、三番目が各家庭の本尊だから、各家庭だけで信心していても駄目、御寺に参詣しているだけでも駄目、戒壇本尊に御参りしなければ血脈が流れず、功德成仏を得られないと言う、本尊にランク付けが有るような嘘をまことしやかに言う人々がいますが、一切衆生成仏の為に顕された本尊にランクが有るはずが無いのであります。全ての本尊の中味は、弘安二年十月一日、日蓮大聖人が感得された、眼に見えないけれども確かに存在し悟られた、出世の本懐を宗旨として本尊に顕したのでありますから。中味が同じなのに、本尊の外見でランクが有るならば、本尊によって中味の法が違うという矛盾に満ちた法を信仰している事になってしまうのであります。

○森羅万象全ての生命が繋がっていて、全ての生命が御互いに支え支えられあって、全ての生命が存在している。地獄の生命とも仏の生命とも繋がっていて、全ての生命は平等で、全ての生命が成仏出来る資格を本然として持っている事を本尊は顕しているのであります。

○本尊は、病気が治る、御金が儲かる、悩みが無くなるという自分の希望欲望を達成する現世利益の踏台、手段としての対象物ではなく、自分の生命に具わる仏性を確認し、自覚する為の本尊であります。

法華経方便品第二（開結166p）「諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもう。舍利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舍利弗是れを諸仏は唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと為づく。」一切衆生成仏という一大事因縁の為に、一切衆生に【開・示・悟・入】してもらいたい為に、この世に仏として現れ、法を説き示した本質が本尊である事を忘れ、現世利益に走り流される事は信仰では無いのであります。

○本尊は、インド、中国、日本の文字と発音の合体で顕されており、法華経を中心とした世界観の上に顕されている。日本の文化に限定固執化したものでは無いし、日本文化を他国の信仰者に強要強制するものではありません。

○日蓮大聖人が本尊を顕しているのですが、「新尼御前御返事」（全906p）に、「日蓮が重恩の人なれば扶けたてまつらんために此の御本尊をわたし奉るならば十羅刹定めて偏頗の法師とをぼしめされなん」と示され。日蓮個人の判断で、与える与えないと自由になるものでは無く、南無妙法蓮華経の法を信じ叶う者に与えなければ、日蓮も十羅刹女にでさえ批難されてしまい、仏罰をこうむると示され、日蓮が書き顕しているけれども、日蓮が自由に出来る個人的表現物、所有物では無いと示されているのであります。

○世の中に百億体の本尊が存在すれば、法が百億あるというのではなく、法は一つでかつ、全体に遍満し繋がっている全体でもあります。この事を諸法実相、一念三千と言うのであります。百億体の本尊は、根本中心の法を拝する百億の窓であります。譬えて言えば、森羅万象三千大千世界を球体とすれば、法は球体の中心に有り、百億の本尊は球体表面に中

心に向かって付いている窓で、百億の本尊の窓から見える中味は全ての生命の根本中心の法一つなのであります。その一つの根本中心の法を一人一人の信仰者に伝え、各家庭で正法の信心修行をする為に、百億の本尊が書かれたり印刷されたりしているのであります。窓が法では無く、窓を通じて、その奥が法であり、本当の本尊であり、その法は、実は信ずる者の胸中の肉弾（己心の仏界）を古里としているのであります。ですから、窓と同時に、私達を含む森羅万象の生命を写している鏡なのであります。「あなた方の生命は、南無妙法蓮華經の仏の生命を根本として、断尽する事の出来ない九界の生命を具えて、こうなっているんだよ。」と写し教えてくれているのであります。本体は私達で、鏡は虚像であります。しかし、鏡を用いなければ、私達は私達の生命を正しく自覚する事が出来ない所以であります。

○仏教の基本的目的は何宗であろうが、一切衆生成仏の教えであります。一切衆生成仏を掲げず、説かないで、靈驗あらたかな病氣平癒や商売繁盛、金運、良縁、厄払い、交通安全等を説いている宗教は宗教では無いのであります。同じ山の頂上を目指すなら色々な道が有っても、どれも正しい。「法論は、どちらが勝っても釈迦の恥」という諺が有りますが、はたして全ての道が一切衆生成仏の頂上に通じているのでしょうか。釈迦が悟った法も、阿弥陀如来が悟った法も、大日如来が悟った法も、観音や薬師や地藏が菩薩として修行している法も同一の法で無ければ、矛盾することになります。釈迦の成仏と阿弥陀如来の成仏と、それぞれの成仏が違ふのであれば、基本的一切衆生成仏は成立しない事になります。一つ前の項目の譬えで示したように釈迦も阿弥陀如来等々も、一つの窓であり、その窓を覗いて見えるのは同じ法で無ければ辻褄が合わない事になります。全ての仏菩薩が悟った一つの法が、妙法蓮華經であると法華經に説かれているのであります。仏を拝むのではなく、仏が悟った法を信仰しなければ、仏と同じ様に仏にはなれないという事を、日蓮大聖人は本尊に示したのであります。

○本尊問答抄（全366p）「本尊とは勝れたるを用ふべし」

勝れるとは、仏法の根本目的である、一切衆生成仏の法を満たし顕している本尊でなければ、用いる本尊に値しないという意味であります。

○日蓮大聖人は、「上行菩薩の再誕」とし、法華經継承の正統を主張し、「日蓮は常不輕

菩薩の跡を継ぐ」とし、

「寺泊御書」（全953p）

「法華経は三世の説法の儀式なり、過去の不軽品は今の勸持品今の勸持品は過去の不軽品なり、今の勸持品は未来は不軽品為可し、其の時は日蓮は即ち不軽菩薩為可し」とし、末法逆縁の荒凡夫の衆生に対する忍難の逆縁下種という、法華経の行者の生き方を示され、この上行菩薩と常不軽菩薩の二つの要素が一体化し日蓮大聖人が末法の本佛で有る事が成立するのであります。

本尊には、上行菩薩の表示をされていますが、常不軽菩薩はが示されていません。これは、本尊が龍ノ口法難直後から顕される事から、自身を末法の法華経の行者、常不軽菩薩の立場から本尊を示されている為に、常不軽菩薩を表示されていないのだと思われます。表示されていない事が、一層日蓮大聖人の「其の時は日蓮は即ち不軽菩薩為可し」の立場を鮮明に表示されているのであります。

佐渡始顕の本尊の讚文には、「文永八年太才辛未九月十二日蒙御勘 遠流佐渡国同十年太才癸酉七月八日凶之 此法華経大曼陀羅 仏滅後二千二百二十余年一閻浮提之内未曾有之日蓮始凶之 如来現在 猶多怨嫉 況滅度後 法華経弘通之故 有留難事 仏語不虛也」

と有り、常不軽菩薩の言葉は有りませんが、法華経身読の法華経の行者、常不軽菩薩の立場を示されているのであります。

○「本尊問答抄」（全）弘安元年（1278）

「法華経の題目を以って本尊とすべし」

と示されています。しかし、

「報恩抄」（全）建治二年（1276）には、

「日本乃至一閻浮提一同に、本門の教主釈尊を本尊とすべし」

と示されている為に、釈尊を本尊にする事が正しいんだと主張し、法華経は釈尊が説いたのだから、説いた釈尊の方が尊いと主張する方々があります。

釈尊も法華経を聞き、修行し、悟って成仏し、私と同じ様に一切衆生に成仏して貰いたいと考え、法華経の説法をしたのであります。ですから、法前仏後（法が本然として存在していて後で仏が悟る）であって、仏前法後（仏がいて仏が法をあみだして衆生に説いた）の考えは勘違いなのであります。神は荒唐無稽の天地創造を主張しますが、仏は天地

創造を説かず、森羅万象全ての生命に共有共通の法（道理）を主張するのであります。

日蓮大聖人の「教主釈尊を本尊とすべし」との文面のままが真意とするならば、本尊の中央首題には、必ず「南無釈迦牟尼仏」と書かれたはずであります。しかし、日蓮大聖人は一貫して「南無妙法蓮華経」と書かれたという事は、釈尊の悟りの中味こそが本尊であると悟ったからであります。ですから、「報恩抄」の「釈尊を本尊とすべし」は、【10】で説明した、一切の仏菩薩の悟りの中味は妙法蓮華経という意味であり、「本門の教主釈尊の中味である南無妙法蓮華経を本尊とすべし」という意味なのであります。

○本尊書写は一貫して、向かって右側を上座として優先して顕されています。

不動明王（右）愛染明王（左）

鬼子母神（右）十羅刹女（左）

天台大師（右）伝教大師（左）

天照大神（右）八幡大菩薩（左）

この事から、多宝如来（右）釈迦牟尼仏（左）という事は、多宝如来の方が釈迦牟尼仏より上座という事になります。つまり、多宝如来の使命と責任は、妙法蓮華経の法を、いついかなる時代、国に於いても駆けつけ、宝塔を建て妙法蓮華経の法が真実である事を証明する事でもありますから、多宝如来の中味は中央首題の南無妙法蓮華経。釈迦牟尼仏の中味も南無妙法蓮華経という事を示す為に、多宝如来を上座に顕されているのであります。

本尊の姿からも、釈尊を仏像にして釈尊を拝むのではなく、釈尊の中味を拝まなければ釈尊と同じ様に仏になる事は出来ない事を日蓮大聖人は我々末法の衆生に示されていることが理解できるのであります。

※この「本尊の図表と解説」は三寶院所属の米国法華講員の「本尊に何が書いてあるのか知りたい」という要望を受け入れて取り組みました。当初、米国の方は漢字が読めないのだから分からないんだと考え取り組んでいるうちに、待てよ、日本人も漢字は読めるけれども内容は分かっていないのではないだろうかと考え執筆しました。当然、日蓮大聖人の信仰をされている方々だけではなく、信仰されていない一般の方々にも、日蓮大聖人の顕された本尊は、この様な内容であり、この様な法と魂を一切衆生に伝えようとしている事を、眼に触れた方々に妙法の縁として認識して頂ければと思いました。

米国創価学会の出している「HONZON MAP」を見せて貰いましたが、ただ、何処に何が書

いてあるかだけの浅薄なものであり、さすがに伝統的に本尊を「幸福製造機」と称し、自分が幸せになる為の、自分を中心にした本尊であり、本尊を中心にした自分では無い姿勢を垣間見る事が出来ました。何が何処に書いてあるのか、だけでは無く、それはどういう意味が込められているのかという点に出来るだけ触れるように書きました。本尊内の座配順序は依智で書き始められた本尊から、段階的に書き加えられていく本尊の姿を参考にして、この様な書き順ではないかと考えて番号を付けました。

本尊を軽んじ冒瀆するものでは無く、日蓮大聖人が本尊に込められた「日蓮が魂は南無妙法蓮華經に過ぎたるは無し」の法魂に一步でも正直に近づく一助となる為にと思い書かして頂いた次第であります。

2015. 11. 15 廣田 頼道

HIROTA RAIDO